

# 森の名手シリーズ 43

名人

長屋 一男 (63)  
岐阜県笠松町

聞き手

浦崎 幹八郎  
岐阜工業高等専門学校2年  
平成25年取材



## 和傘 轆轤づくり

### 1. 和傘轆轤はこれです。

轆轤はこの部分です。頭轆轤が上側に入り、手元轆轤は下側に入ります。二個でセットして、骨が入る隙間を目ついでいます。目に傘の骨が入って、糸で骨を繋いでいきます。竹の骨と轆轤を繋げなくちゃ外れちゃいます。でも固定しちゃうかん。動くように止めなくちゃあかんのです。そのため目にみんな穴が開いてるんです。全部に開いています。



和傘の様子。図示した部分が轆轤である



手元轆轤(左)と頭轆轤(右)



轆轤の目の様子。“穴”と“半穴”が見える

### 2. 材料です。

半穴も開いています。繋ぎ屋さんが骨を入れて、糸繋ぐときに、針を反対側に抜かなくて。ほうすと隣のところが半分切れてないと糸が抜けてけないんです。だから鉋が抜けたところにみんな半穴があるんです。

轆轤の材料は、エゴノキっていう、昔から和傘の轆轤作る木です。江戸時代、岐阜が産地になってから、何百年もこの木使ってる。この木は、柔らかくて粘り強いんです。加工がしやすいんです。山は自然環境厳しいですから、周りにある木より伸びるんことには光合成できんです。だからそこまで一生懸命伸びるんです。やつこそから枝伸ばせるっていうことです。つてことは、その高さまで節が少なく、すつとした真直ぐな木が育つんです。真直ぐの節のないすつとした木を仕入れたいわけです。

外周あたりは、木としては年輪が緻密です。木の芯あたりは年輪粗いです。年輪が粗いと目が弱いので、できた後に、目の弱いやつは圧力かけるとひび割れが入って、パラパラと折れるんです。だから大ききにあつた材料を使うのね。だいたい3mmから、どんだけ大ききでも10mmくらい、直径に対して太くなるくらいやね。

### 3. 轆轤づくり

材料を乾燥させて、それを切つて、木地引いて、目切り機かけて、出荷です。機械で全部やります。

（木地作り）  
まず自然乾燥をだいたい1年〜1年半くらいします。そのあと、製品にするために輪切りにします。この状態「まるめ」つています。そのときに、指の感覚とか目で見てできるだけ節を避けます。見えんところを見極める。そこは勘と経験です。わかりにくいところもできるだけ避けます。節は固いつて

大きさ(直径)	目数	用途	大きさ(直径)	目数	用途	
九分	24軒	日傘	一寸一分	48軒	蛇の目傘	
	36軒	日傘		36軒	小番蛇傘	
一寸	40軒	日傘	一寸八分	48軒	番傘	
	42軒	日傘		50軒	差し掛け傘	
	48軒	蛇の目傘		50軒	野点傘	
一寸一分	36軒	日傘	二寸五分	60軒	野点傘	
	40軒	蛇の目傘		三寸二分	70軒	野点傘
	44軒	蛇の目傘				

目の数を「軒」という

（目切り）  
今度は目切りついでいう工程です。木地から目があがる状態にしなげます。一番繊細な仕事です。ノコギリが回転してきます。そして目をノコギリで引きます。これでか所目切りしました。次に歯車で隣の場所へくるわけです。これが40軒にかかると、轆轤が一周すると40周ノコギリまわって、40か所目が入つてくわけです。ほんで目に穴開けるのは、目切つてまわった状態でノコギリが半周しているうちに、鉋がカムによつて出てきて、目に穴が開くわけです。歯車をセットしたらノコギリの厚さを決め、次に鉋穴の位置を前後左右調節してから目を切ります。ノコギリはいろんな厚さの物、歯車は目の種類ごとに用意してあります。

刃物にしても、焼き入れも自分でします。その温度も私ら経験でやりますけど、大変です。炭をコンロでおこして、赤めです。だいたい1300度。鉄が溶ける手前くらいです。私ら色で見ると赤けど、赤色通り越してオレンジ色に近づいた状態です。オレンジ色で焼き入れするんです。今は酸素バーナーで赤めてます。

### 4. エゴノキ・プロジェクト

地域で山を整地する人がいなくなり、エゴノキを供給する業者もなくなり、材料仕入れるルートが途絶えちゃつたんです。ほんでいろいろな人に相談したら、美濃市の岐阜県立森林文化アカデミーの久津輪先生が「僕がちょっと調べてみるわ」と言ってくれました。たまたま美濃市片知に、炭を焼く窯の取り組みの取材に行かれたら、窯の周りにエゴノキがいっぱい立つてたそうなんです。それで聞いたら、「そんなもんなんだからでもあるよ」つていう状態なんです。それから片知の方の協力を得て絞つて切つていただきます。それがエゴノキ・プロジェクトの始まりです。

### 5. こだわってます。



エゴノキ・プロジェクト2013にて伐採したエゴノキとともに、後列中央が長屋名人、前列右側が岐阜県立森林文化アカデミー久津輪准教授、後列右側が「山の駅ふくべ」小椋氏

和傘っていうのは、分業なんです。職人さんの仕事を1月以上かかつて、はじめて一本の傘になるんです。私たちの仕事は最初の仕事だけ、最後の職人さんのことを考えて仕事する、それを考えてます。それは番わかりやすく言うと、木地に油つけてます。目切りのための潤滑油ですが、つなぎ屋さんが骨をつなぐとき、油がついてれば針が通しやすいんです。

やけどもう傘は、産業としてギリギリです。これは轆轤屋だけじゃなくて、骨屋さんも貼り屋さんも、縮ほかの業種の職人さんたちみんな同じなんです。

だからほんとに今、ここ3年4年5年の内に何とかしんことには、技術的に残せても、その先産業として成り立たない。若い子にバトンタッチしても、その方の将来考えると、継いでくつて言えないのが現実です。

傘にした場合、轆轤っていうのは、隠れてしまつてほんとに目立たない部品です。広げれば紙とか骨とかかが糸が目に入ります。すばめれば何にも見えないです。だからほんとに、紙と骨を支える縁の下の力持ちやもんで、一般の人には、こういう目立たない部品も作つて職人がいることを知つていただければありがたいなつて思つております。それと、多くの人たちによつて轆轤は支えられています。とても感謝しています。

### 名人 長屋 一男さんのプロフィール

●生年月日・昭和25年1月8日生まれ  
●職業・和傘轆轤づくり職人

昭和46年に家業の長屋木工所に入社以来、和傘轆轤づくりに従事されている。長屋木工所は、日本で唯一の和傘轆轤製造事業所であり、岐阜の和傘づくりを支えている。

轆轤の材料となるエゴノキの確保が困難になる中、平成24年に岐阜県立森林文化アカデミーの久津輪准教授の呼び掛けで始まったエゴノキプロジェクトに立ち上げから参加し、エゴノキを安定的に供給できるよう毎年美濃市内にて活動中である。

平成27年には森林文化アカデミーの卒業生が入社弟子入りし、技術の伝承と後継者の育成に尽力されている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。  
【森の名手・名人編集担当】  
公益社団法人  
岐阜県緑化推進委員会 専務理事 黒崎隆司